

No. 203
植 物

ミミカキグサ *Utricularia bifida* (タヌキモ科)

ミミカキグサは、湿地に生育するタヌキモ科タヌキモ属の食虫植物です(写真1, 2)。食虫植物が獲物となる昆虫などの小動物を捕まえる方法は、大別して(1)ねばねばした粘液でからめとる、(2)葉をとじて挟みこむ、(3)袋状になった葉に落とし込む、(4)水中の小さい袋に吸い込む、(5)迷路に誘いこむ、の5つがあります。

タヌキモ科は食虫植物からなるグループで、日本では(1)粘り着く方式をするムシトリスミレ属と(4)吸い込む方式のタヌキモ属が見られます。タヌキモ属の植物は変わった体のつくりをしています。根はなく、茎は葉との区別がわかりにくい「軸」と呼ばれます。そして葉は、種によって多様に変化しています。



写真1 ミミカキグサの標本



写真2 ミミカキグサの花

ミミカキグサの場合、軸が横にはい、そのところどころに細い米粒のような形の小さな葉(写真3)と獲物を捕るためのごく小さな袋(捕虫のう)(写真4)が付きます。捕虫のうは普段はふたが閉まっていてへこんでいますが、獲物が近づくとふたが開き、捕虫のうが膨らんで、獲物をまわりの水ごと吸い込んでしまいます。



写真3 ミミカキグサの葉

夏になると、横にはう軸から、花を付けるための花軸が上に伸び出し、その先に黄色い花を数個付けます(写真2)。咲き終わると、花びらは落ちますが、がくは残って大きくなり果実を包み込みます。このがくと花軸の形が「耳かき」に似ているのが、植物の名前の由来です。



写真4 ミミカキグサの捕虫のう(矢頭)

食虫植物の仲間は、競争相手が多くなりがちな生育条件の良い環境を避け、栄養が乏しいなどの生育に不適な環境で、小動物を捕らえて栄養を補いながら生活していると考えられています。このような食虫植物が生育できる特殊な湿地環境は年々減少しており、それともなって食虫植物も減少傾向にあると考えられています。ミミカキグサは「熊本県の保護上重要な野生動植物リストレッドリスト2014」では、準絶滅危惧(N T)に選定されています。(前田哲弥)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分
JR 松橋駅より約3km



編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301
2017年11月30日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



イベント情報 (平成29年12月～平成30年3月)

1 博物館ネットワークセンター 第5回企画展「阿蘇の植物」

阿蘇の草原や山地に自生する植物をさく葉標本と生態写真で紹介します。阿蘇の自然の豊かさとその価値について興味、関心を持っていただける展示となっております。

○開催期間

平成29年12月5日(火)

～平成30年2月25日(日)

※月曜(祝日の場合は翌日)、12月29日～

1月3日は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター



ヒメユリ

2 移動展示「荒玉地域 昭和の祭り」と芸能」

民俗写真家の故 白石巖氏が撮影した写真の中から、的ばかい、腹赤の楽、野原神社の祭礼など、荒玉地域の祭りや芸能に関する写真を展示し、地域の民俗文化の特色を紹介いたします。

○開催期間

平成29年12月1日(金)

～12月26日(火)

○会場

長洲町金魚の館



的ばかい

3 フィールドミュージアムへ飛びだそう! 「水辺の冬鳥を観察しよう」

大野川にやってくる冬鳥を観察します。今年度最後のフィールドミュージアムとなりますので、興味のある方は、参加してみたいかがでしょうか。(定員: 20名)

○開催日時 平成30年2月3日(土) 13:30～15:30

○会場 宇城市大野川河口周辺

○受付期間 平成30年1月10日(水)～1月24日(水)



活動報告 (平成29年7月～平成29年11月)

1 キッズミュージアム

平成29年7月22日(土)、23日(日)の2日間、熊本県博物館ネットワークセンターを会場にして毎年恒例のキッズミュージアムが開催されました。ミュージアムパートナーズクラブとの共催で開催されたこのイベントには、児童・生徒を始め230名の方々が参加し、化石レプリカや柿渋染め等を体験しました。

こうした活動を通して自然や伝統文化について学ぶ機会を増やしていきたいと思っております。



親子で体験(化石レプリカ)

2 博物館学芸員等スキルアップ研修会(平成29年度第2回)



熱心に受講する参加者

平成29年9月2日(土)、20日(水)の2日間、熊本県博物館ネットワークセンターを会場にして博物館学芸員等スキルアップ研修会が開催されました。博物館、資料館等の職員、市町村文化財担当職員等の技能向上を目的として県内市町村を中心に20名が参加しました。

今回は、襖の下張り剥がしについて、兵庫県三木市文化財保護審議会委員で文化財保存修復家の尾立和則氏を講師に迎え、実際に作業をしながら専門的な知識や技能について学ぶことができました。

今後も、こうした研修会等を通して「熊本県総合博物館ネットワーク」の充実を図ってまいります。

3 その他

(1) 博物館ネットワークセンター企画展 熊本地震と文化財レスキュー(7/11～9/3) (パリアクシア展示: 7/3～8/27) ちょっと昔のくらし探検Ⅷ(9/12～11/26)

(2) フィールドミュージアムへ飛びだそう! 土星と夏の星座を観察しよう(8/26) 阿蘇の昆虫を観察しよう(9/9) 月を観察し写真を撮ろう(11/2) 落ち葉図鑑を作ろう(11/26)

(3) 移動体験教室及び講師派遣

化石レプリカ、葉脈標本、貝がらクラフト、草木染め等のプログラムを計16の学校や社会教育施設等からの依頼を受けて実施しました。(10月末時点)



移動体験教室(貝がらクラフト)

No. 199 地学 高遊原台地をつくる溶岩

熊本空港がある高遊原台地は、火山の噴火で噴き出した溶岩流でできています。写真1のように、大峯の山頂付近から西方に熊本空港を望むと、起伏の無い平坦な土地と急な崖でできた台地の様子がわかります。溶岩流でできたこのような台地を溶岩台地といいます。

この溶岩台地は安山岩という岩石でできており、全体的に灰色で、角閃石という黒っぽくて細長い鉱物を含んでいます(写真2)。台地斜面では、この岩石の露出した崖が所々で見られます。また、溶岩流は東西約9km、南北約4km、厚さ約100mで分布しています。このように大規模な溶岩流を噴き出した火山とはどのようなものなのでしょう？

西原村にある大峯(標高407.8m)は軽石やスコリアなどの火山砕屑物でできた火砕丘(火山の噴火で噴出した火山砕屑物が降り積もってできた円錐形の小型の火山)で、高遊原台地を形成する溶岩を噴き出しました。この火山砕屑物と溶岩は一連の火山活動で噴き出したものです。この火山活動は、阿蘇火山で4回発生した巨大噴火の3回目と4回目の噴火の間に起きたものであり、約9万年前に噴火したことがわかっています。また、大峯は阿蘇カルデラの西側にありますが、阿蘇火山の側火山(大型火山の中腹や裾野にある小型火山)とされています。(廣田志乃)



写真1 大峯から熊本空港を望む(2015年2月)



写真2 高遊原台地をつくる岩石(安山岩)

No. 200 民俗 藁すぐりと藁打槌



藁すぐり 益城町田原 92 × 52 × 9cm

藁すぐりと藁打槌は、どちらも、藁を加工して道具を作る際の下準備に使う道具です。

藁すぐりは、藁を細工しやすくするために余分な葉を落とす道具です。この作業は手の指を櫛状に曲げてでも出来るのですが、より効率よく行えるよう、櫛状の道具を手作りして使うようになりました。熊本県では、竹を組んで作った大型のものも広く使われていたようです。

藁打槌は、藁打ちという作業で用いる木槌です。藁はそのままでは切れやすいのですが、平らな石や木の台の上で、藁打槌で満遍なく叩くことで、柔らかく丈夫になり、細工しやすくなります。藁打槌は樫や椿などの堅い木を使い、使う人の手に合わせて手作りされていました。



藁打槌 宇城市三角町 10.5 × 10.5 × 30.3cm

かつて藁は、縄や履物、敷物、祭りの供え物など、様々な道具の材料として利用されていました。農家では、冬場の農作業のないときには、縄ないなどの藁仕事を主に行っており、夜遅くまで藁を叩く音が響いていたそうです。(迫田久美子)

No. 201 動物 オオコノハズク Otus lempiji (フクロウ科)

オオコノハズク(写真1, 2)は全長約25cmのフクロウの仲間で、熊本県ではほぼ全域に留鳥として生息していると考えられていますが、確認記録が数年に1羽程度という珍しい鳥で、全国的にみても記録は多くありません。本種の確認を難しくしている理由として、個体数が少ないこと以外に、夜行性であること、森林にすむこと、小型種であること、鳴き声をはっきりしないことなどが考えられます。



写真1 オオコノハズク剥製

全身灰褐色の地色に黒や灰色の細かい模様が入り、頭の上には「羽角」と呼ばれるウサギの耳に似た突起があります。これは冠羽の一種で、実際の耳は側頭部にあり、羽毛の中に隠れて見えません。同属のコノハズクとは体が一回りほど大きく、目が鮮やかなオレンジ色をしていることなどで区別されます。



写真2 生態写真(2017年9月 八代市)

熊本県では低山地から山地で、菊池渓谷や九州山地など自然度が高い森林での確認が多いものの、熊本市内や天草でも確認されています。意外と私たちの身近なところでも、夜の森を注意深く観察すると、暗闇の中に2つ、オレンジ色の目が並んでいるかもしれません。(中藺洋行)

No. 202 歴史 肥後孝子伝 後編(写)(高森町安藤家資料)

『肥後孝子伝』は、江戸時代、熊本藩の中村忠亭(正尊)によって編纂されたもので、前編三巻・後編三巻から成り、前編は天明2年(1782)に、後編は天明6年(1786)に成立しています。本書が成立した背景には、江戸時代中頃から、忠孝を尽くすことや、農業などの勤労に励むことなど、庶民の模範となるような善行を行った「孝子」の表彰が盛んに行われていたことがあります。熊本藩でも、特に藩主細川重賢の宝暦の改革以後、多くの孝子に藩から褒賞が



写真1 上巻 表紙

与えられました。こうした中で、肥後国内の孝子の事跡をまとめて編纂・刊行されたのが本書です。

当センターで収蔵しているのは、後編三巻(上・中・下)の写本で、高森町野尻の川上神社の神官であった安藤幸足が安政2年(1855)に書写したものです。内容を見てみると、後編上巻の一人目に挙げられている野津村善太郎について、八代郡野津郷(現・氷川町)の住民で、父母に孝行し、病気の父の世話を献身的に行い、兄にも同様に尽くして農業に励んだことが記されます。

本書にはこのような親孝行の話など、人物ごとの善行の内容が記述されており、江戸時代の庶民の理想とされていた姿を知ることができます。(松本晃世)

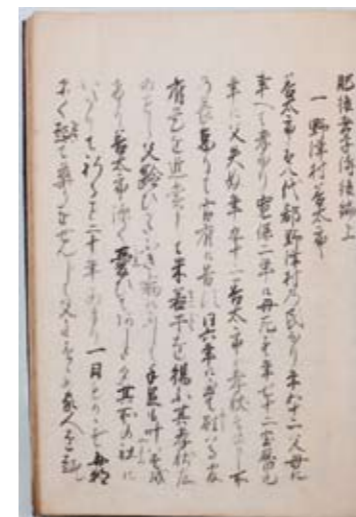


写真2 上巻 本文(拡大)